

忙 申 閑

焼夷弾は相当怖かったらしい。

訪問診療に伺っている高齢女性が話してくれた。その女性は戦時中、奈良県内で暮らしていた。山の上から大阪平野を見ていた時に米軍機が現れ焼夷弾を落とすのが見えた。「アーッ」と叫んでいる間に街は真っ赤に燃え上がり、見るも無惨であった。

翌日、別の高齢女性からたまたま、焼夷弾の話聞くことになった。その方はまさに大阪市内で暮らしていた。焼夷弾が降り注ぐ中、布団にこれでもかと水をかけて全身を隠して身を守ったと言う。その恐怖は想像を絶するものだったであろう。2020年の新型コロナウイルス感染症に対する恐怖とは段違いな戦慄に襲われたに違いない。

こういった話を聞いていると、ふと、我が亡父が命を落としかけたことを思い出す。1度目はまだ戦時中。八尾空港にいた時に、米軍の戦闘機が攻撃を仕掛けてきて機銃掃射を浴びた。弾は外れ何とか難を逃れたが、その弾丸は地面から約2メートルの深さにまで達していた。2度目は1961年の第二室戸台風の時。筆者が生まれる1年余り前、大阪を直撃して甚大な被害を引き起こした台風だ。この時、暴風で何枚もの瓦が舞い、父の頭をかすめた。これらの危機を乗り越えていなければ、筆者はこの世に存在しなかった。十数年前に他界した父は、その後の巨大地震や津波、メルトダウン、そして大規模な気候変動やパンデミック

高齢者を診る

広報委員 弓崎 恭俊

クのことは何も知らずに逝った。

思えば、現在の高齢者は様々な危機、難局を乗り越えてきた人々ばかりだ。自然災害に加え、第二次世界大戦や公害等の人災も含めると枚挙に暇がない。そして何とか命を永らえた方々に、高齢者という枠組みの中で私達は日々の診療を行っている。ただ単に長く生きた人ではなく、それぞれの方の人生に向き合った診療を続けてきたかと問われると自信はない。

そう言えば、施設に入ったものの、すべての医療を拒否する男性がいた。その男性の成育歴・職歴をリサーチして、その労をねぎらい、苦勞して生きてきたのだから堂々と医療を受けてほしいと告げた。やっ

と受け入れてもらったことを思い出す。また、重度の認知症の方でも、月に1度の訪問診療で幼少時の話を続けていると、毎回「先生待ってたよ」と、医師として認識してくれたことがあった。

新型コロナ対応に忙殺されがちな時期であるが、もう一度原点に立ち戻り、気を引き締めて、高齢者一人ひとりの人生に敬意を払いながら診療を続けていきたいと考える。